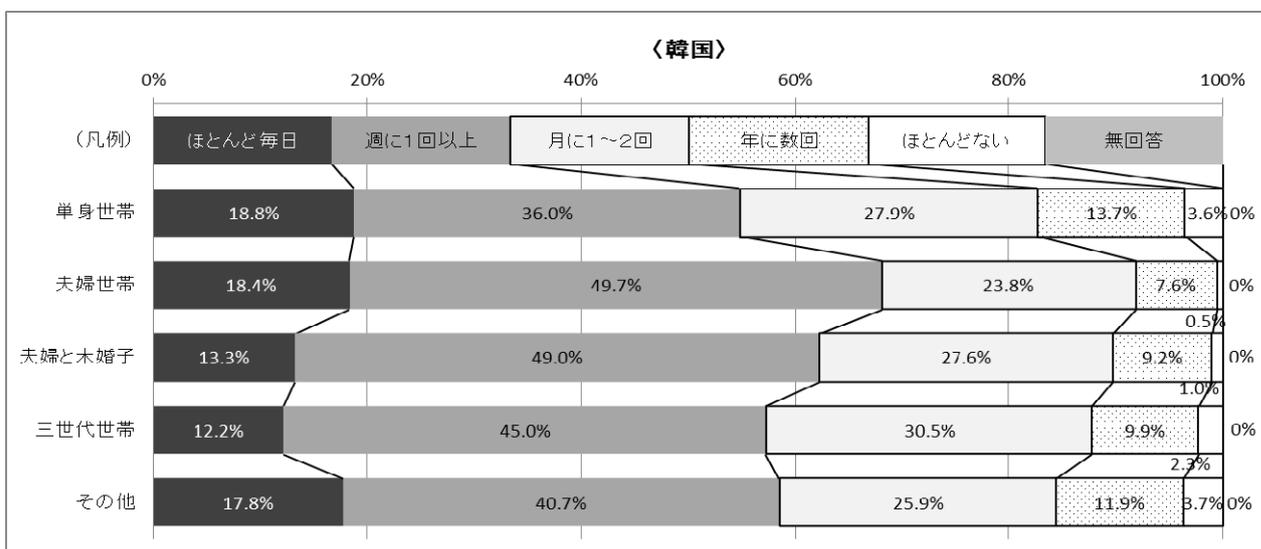
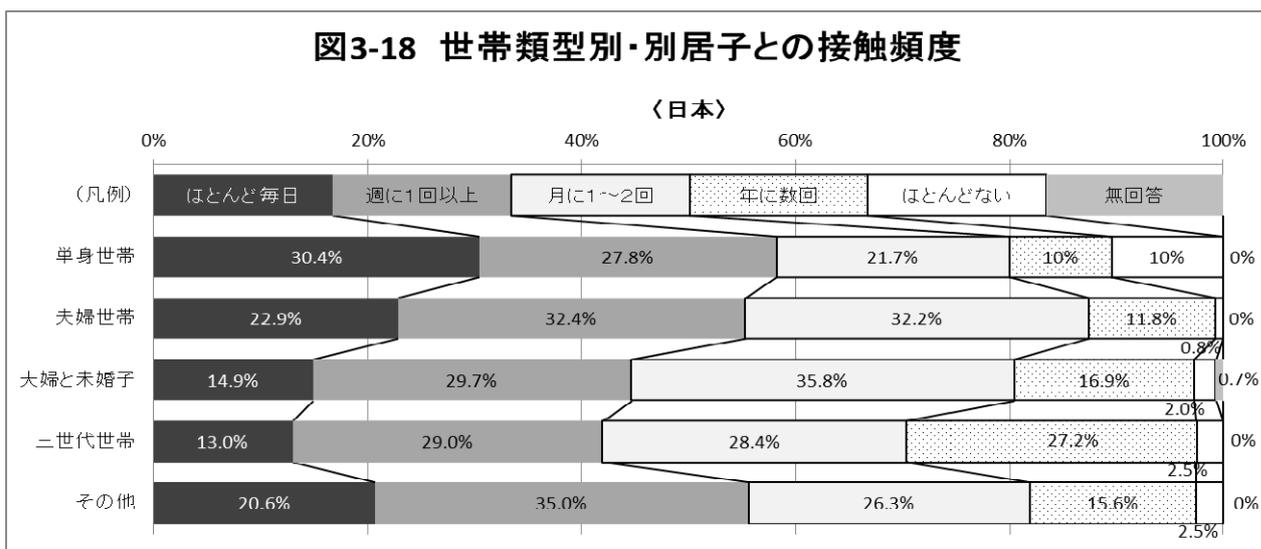


図3-18 世帯類型別・別居子との接触頻度



V 家族観 (Q5)

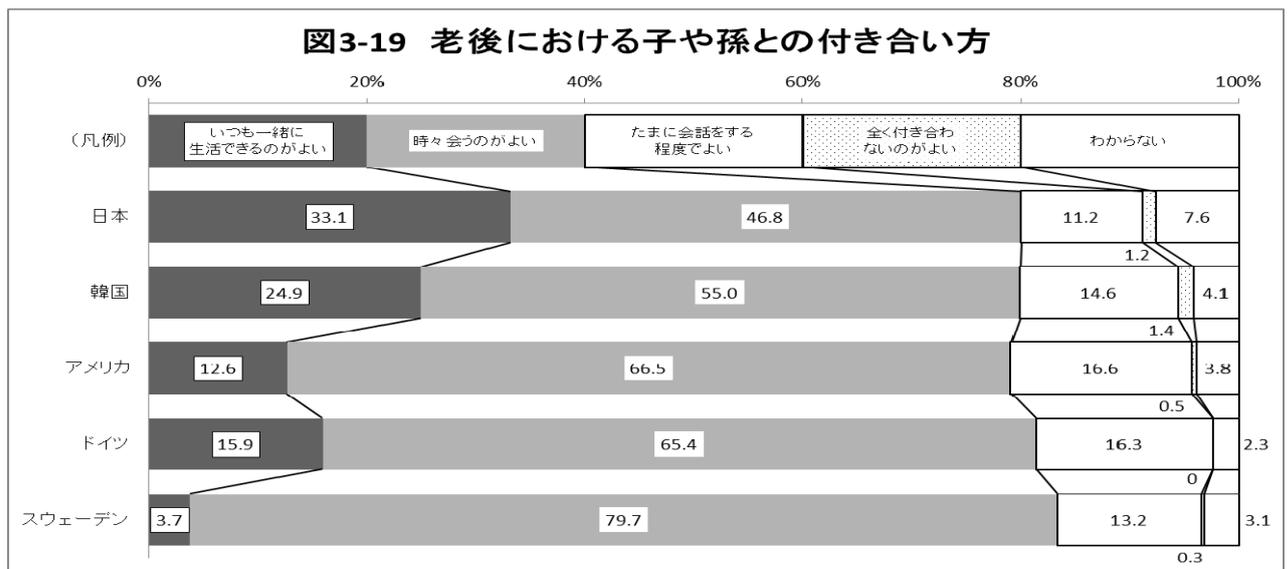
1 調査結果の概要

各国の高齢者は、子どもや孫との日常的な交流をどの程度望んでいるのだろうか。図3-19は、この設問に対する回答の、国別の単純集計結果を示したものである。

5カ国すべてにおいて、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」という意見が最も支持されており、比率の高い順にスウェーデン 79.7%、アメリカ 66.5%、ドイツ 65.4%、韓国 55.0%、日本 46.8%となっている。より親密な関係性を求める「いつも一緒に生活できるのがよい」という意見は、日本における支持率が 33.1%と最も高く、以下、韓国 24.9%、ドイツ 15.9%、アメリカ 12.6%、スウェーデン 3.7%という結果である。5カ国とも、こ

れら2つのカテゴリーの合計比率は約80%であり、「たまに会話をする程度でよい」、「まったく付き合わないのがよい」などの意見を支持する人は少数派であった。全般的に、子どもや孫と最も親密な関係性を求めるのは日本の高齢者であり、韓国の高齢者がこれに次ぐ。一方、親密ななかにも距離をおく関係、すなわち「距離をおいた親密さ」(intimacy at a distance) をよしとするのは欧米3カ国に共通する特徴であるが、とりわけスウェーデンの高齢者にはその傾向が顕著にみられた。

前節でみたように、これら欧米3カ国は日本および韓国に比べて別居子との接触頻度が高かった。欧米3カ国の場合は、密な接触がなされていても、家族観、近親とのつきあい観においては互いの独立性やプライバシーを尊重しようとする姿勢が強いのかもしれない。



2 時系列比較

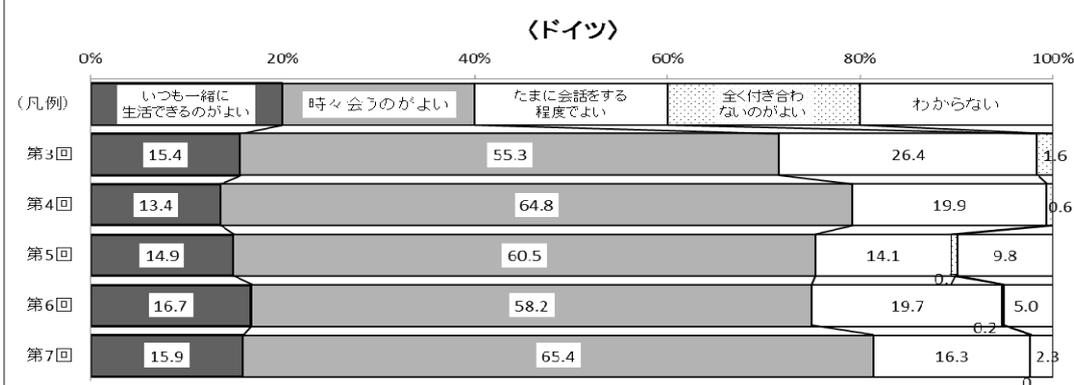
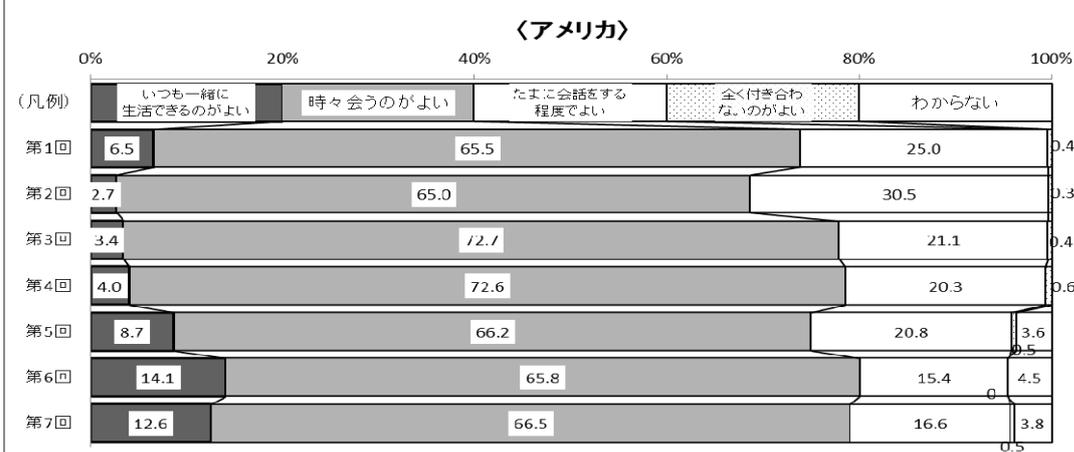
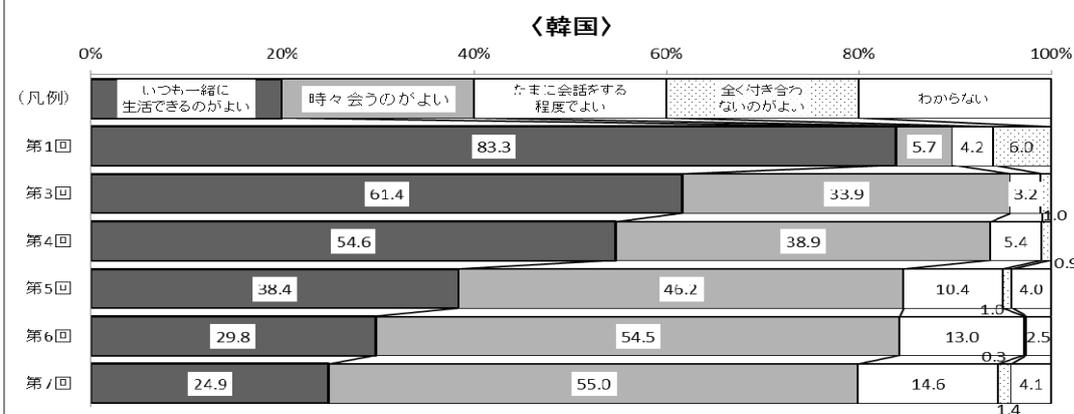
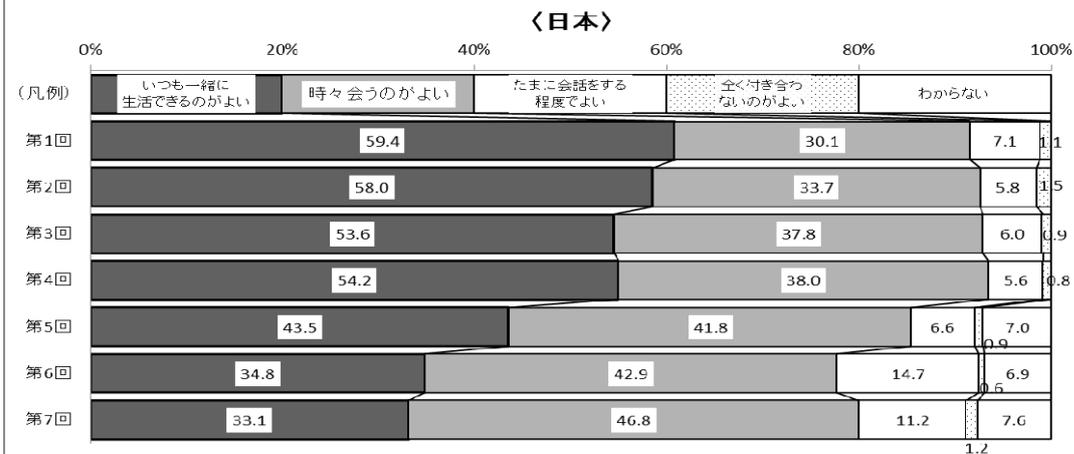
この設問は、過去6回の調査でも採用されているため、スウェーデン以外の4カ国について、時系列的变化をみるため図3-20を作成した。

日本と韓国では、かつて多数派の意見であった「いつも一緒に生活できるのがよい」を支持する人が近年ほど減少し、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が多数派の意見となっている。具体的な数字をあげると、「いつも一緒に生活できるのがよい」は、日本では59.4%から33.1%へ、韓国では83.3%から24.9%へと大幅にポイントを下げている。

替わって、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」という意見を支持する人は、日本では30.1%から46.8%へ、韓国では5.7%から55.0%へとポイントを上げており、とりわけ韓国の変化が大きいことが注目される。

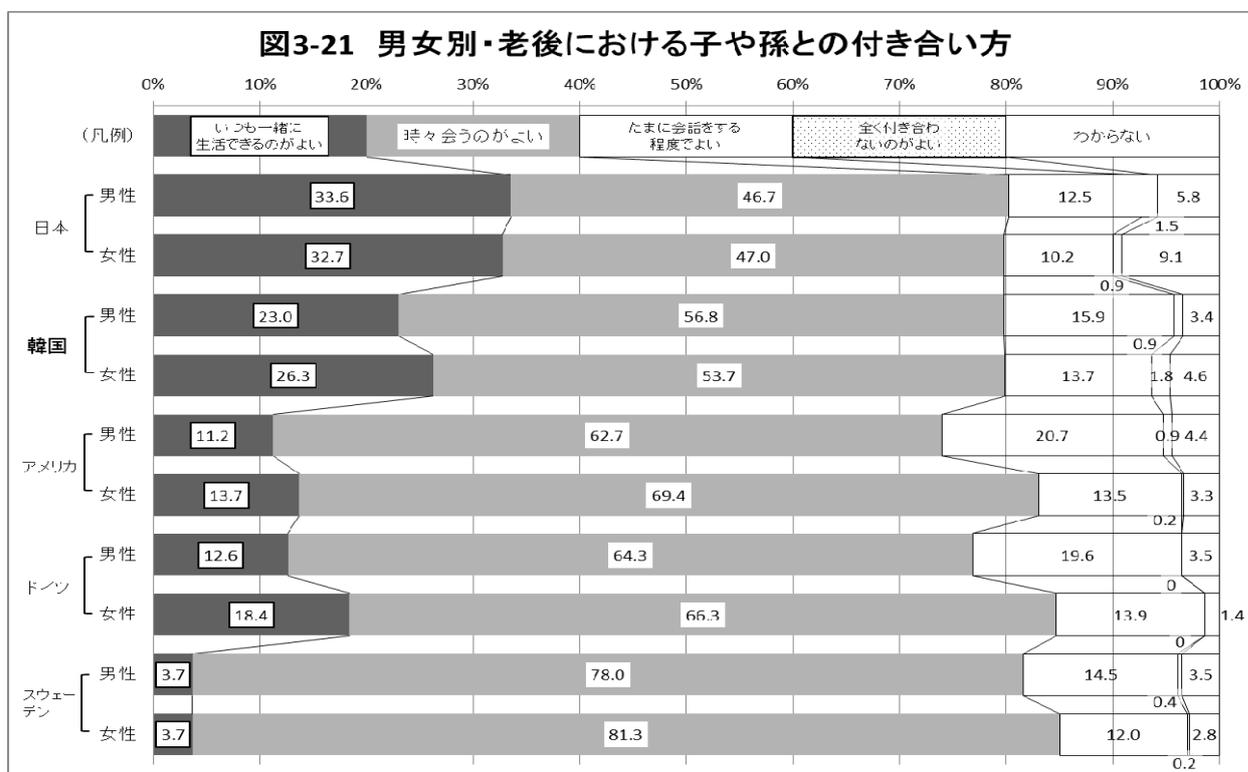
一方、アメリカとドイツでは、相対的には安定した意見傾向がみられ、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が一貫して多数派の意見になっている。しいて変化を挙げるとするなら、アメリカにおいて第2回調査以降、「いつも一緒に生活できるのがよい」という意見を支持する人が、2.7%から12.6%へと増加しており、「たまに会話をする程度でよい」は一貫した傾向はつかみにくいものの、第6回調査では15.4%、第7回調査では16.6%と、かつて20~30%を占めた時代よりはポイントを落としている。日本や韓国では「家族の個人化」ともいうべき意識傾向が強まっているのに対し、小幅な変化とはいえ、アメリカでは家族志向、家族主義的意識が強まる傾向を推測させる。

図3-20 老後における子や孫との付き合い方



3 男女別比較

図3-21は、この設問に関する各国の調査結果を男女別に示したものである。全般的には、いずれの国でも男女間の意見の相違は小さく、文化差のほうが目立つ。とりわけ日本は、男女がきわめて類似した意見傾向を示しており、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」は男性46.7%、女性47.0%、「いつも一緒に生活できるのがよい」は男性33.6%、女性32.7%が支持するなど、似通った比率が示された。



4 年齢階層別比較

前節でみたように、この設問に対する回答傾向に明確な男女差はみられなかった。そこで、男女のサンプルを込みにして年齢階層別に傾向性をみていくことにしよう。

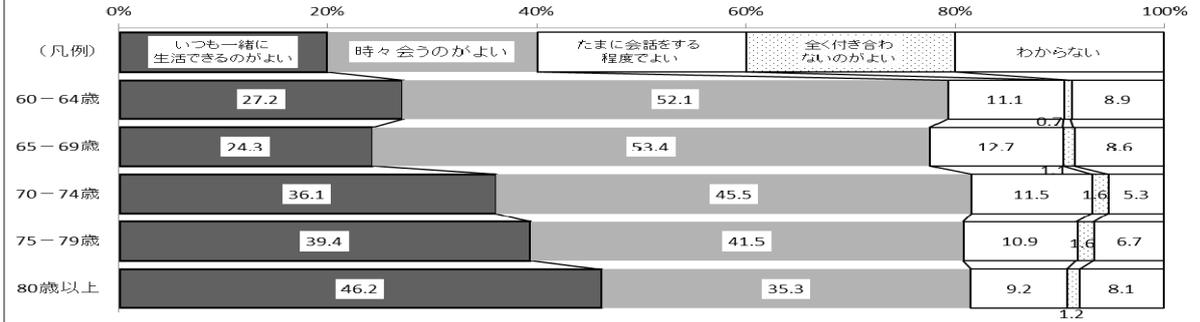
図3-22により、まず日本の状況をみると、「いつも一緒に生活できるのがよい」を支持する人の比率は、おおむね年齢階層が高くなるほど高くなり、60歳代前半では27.2%であるのに対し、80歳以上では46.2%に達する。一方で、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」を支持する人は、60歳代前半で52.1%であるものが、80歳以上では35.3%にとどまっている。韓国についても、日本ほど顕著でないにせよ、類似した傾向がみいだ

せる。

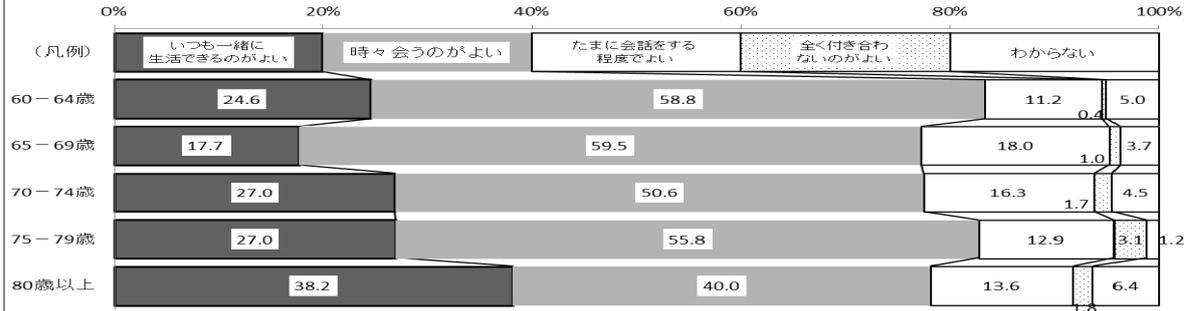
欧米3カ国に関しては、総数レベルで確認した傾向と同様に、いずれの年齢層でも「ときどき会って食事や会話をするのがよい」を支持する意見が多数派を占めている。唯一、ドイツの80歳以上の年齢層では「いつも一緒に生活できるのがよい」が22.9%の支持を集めているものの、多数派の意見というわけではない。総数レベルで「いつも一緒に生活できるのがよい」という意見がきわめて少数であったスウェーデンでは、いずれの年齢階層でもこの傾向は変わらない。3カ国とも「たまに会話をする程度でよい」という意見も、年齢階層とは連動せず10~20%台を占めており、スウェーデンの80歳以上では23.2%を示している点も特徴的である。時系列的変化に関する知見も併せて考えると、欧米諸国における子どもや孫とのつきあいに関する高齢者の意識は長期にわたり安定しているのに対し、日本や韓国では、近年急速に変化している様子をうかがうことができる。

図3-22 年齢階層別・老後における子や孫との付き合い方

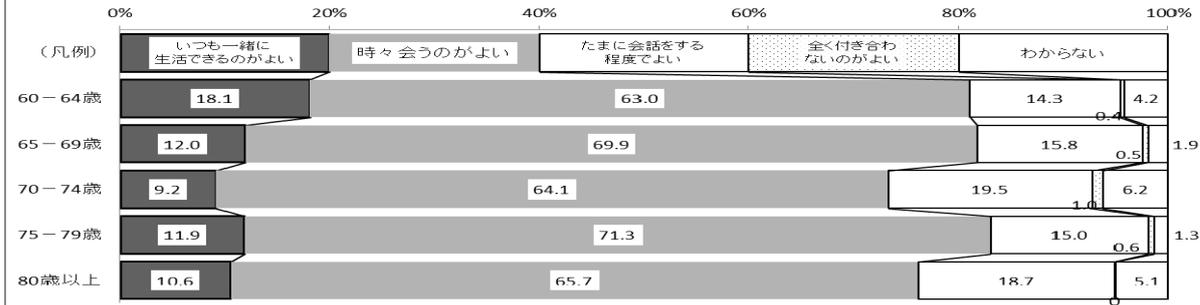
〈日本〉



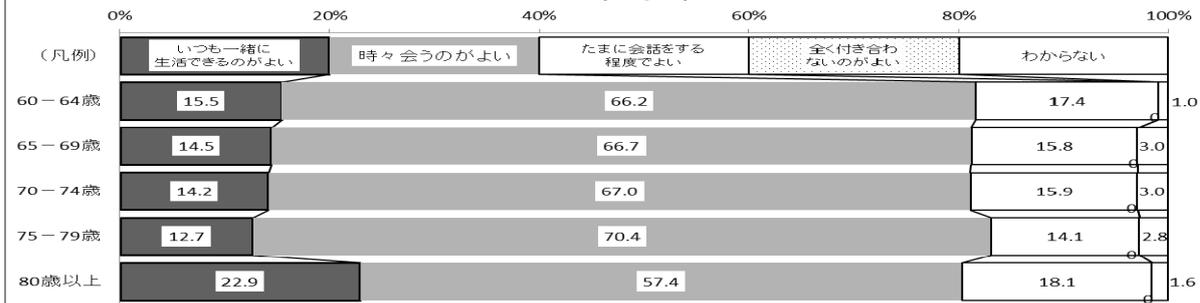
〈韓国〉



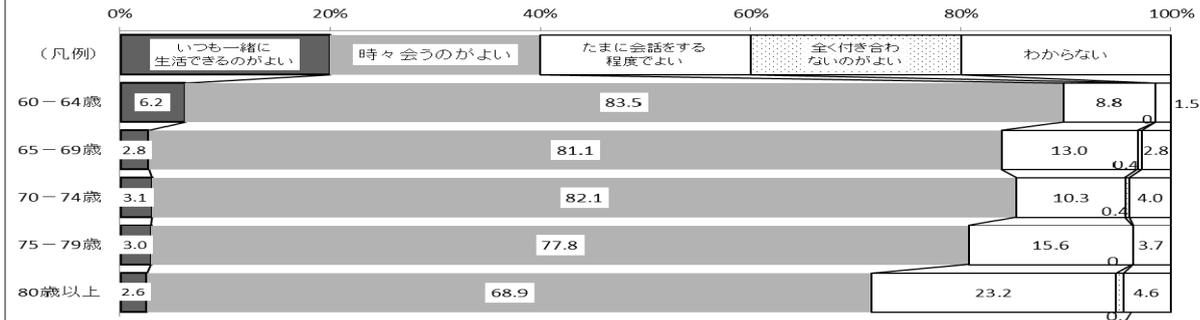
〈アメリカ〉



〈ドイツ〉



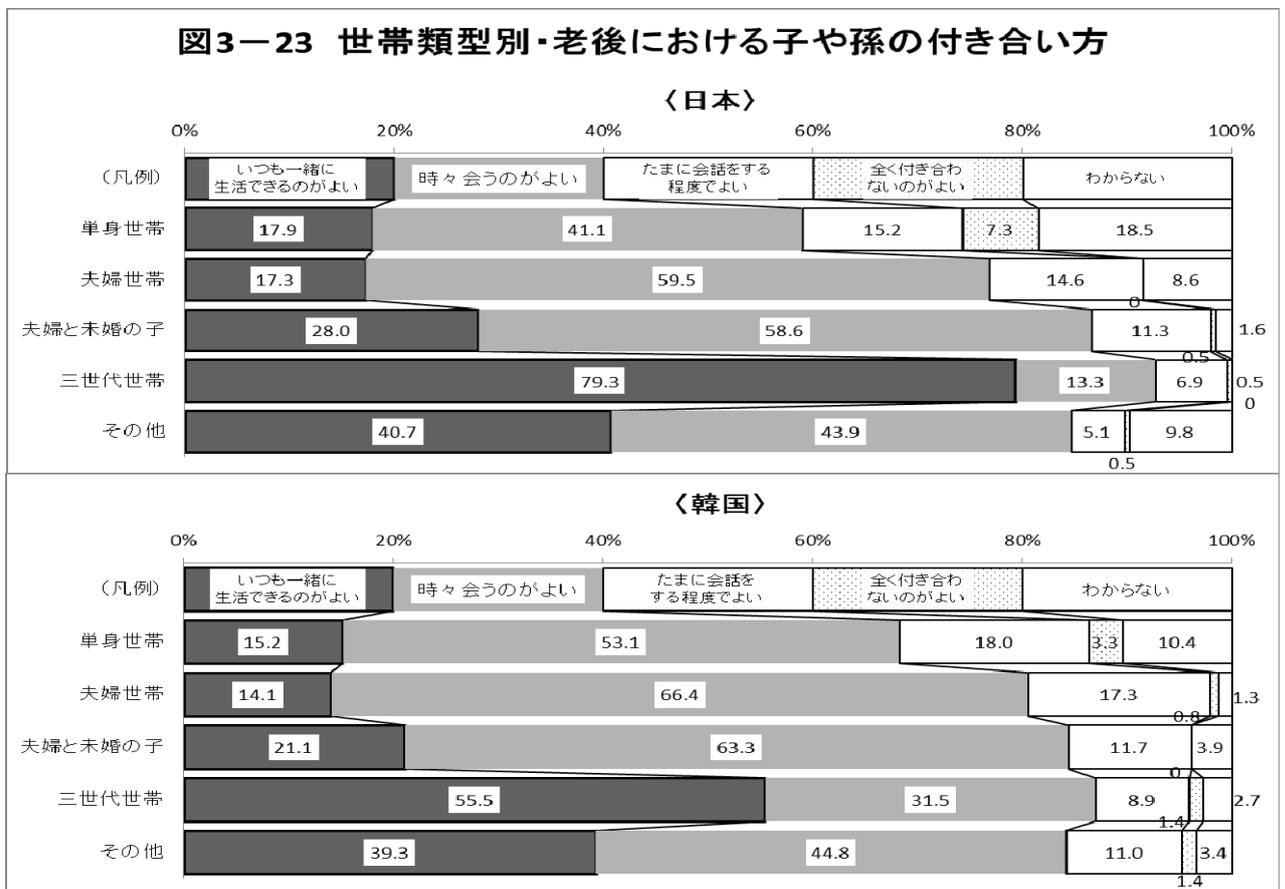
〈スウェーデン〉



5 世帯類型と地域による差異

日本と韓国に限定して、家族観の項目と世帯類型および居住地の人口規模との関連を検討しよう。まず調査対象者の属する世帯の形態により、子どもや孫とのつきあい方に関する考え方に違いがあるか否かをみていく。図3-23によると、「いつも一緒に生活できるのがよい」を支持する意見は、三世代世帯の場合に群を抜いて高く、日本は79.3%、韓国では55.5%を占めている。単身世帯、夫婦世帯、夫婦と未婚の子からなる世帯では、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が日韓ともに最頻値を示し、「いつも一緒に生活できるのがよい」を支持するものは20%前後にすぎない。日韓ともに、単身世帯においては、「たまに会話をする程度でよい」（日本15.2%、韓国18.0%）という回答も相対的に多く、「わからない」と答える人も、日本18.5%、韓国10.4%と多くいた。

いずれの世帯類型のもとで生活する人も、現在の生活実態に調和的な家族観を抱きやすい傾向がみいだせる。各自の家族観ゆえに現在のような世帯構成を選んだのか、あるいは現在の世帯構成を合理化したり自身が納得するために特有の家族観を抱くようになったのか、おそらくその両面の影響関係があるものと考えられる。



居住地の人口規模との関連は、図3-24に示したとおりであるが、日本と韓国では人口規模のカテゴリ区分が異なるため厳密な比較は困難であり、おおよその傾向性を把握するにとどまる。韓国については、都市規模の違いによる明瞭な傾向性は見いだせない。一方、日本では、居住地の人口規模が大きいほど、「いつも一緒に生活できるのがよい」を支持するものが少なくなり、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」を支持するものが増加する傾向を確認できる。「いつも一緒に生活できるのがよい」という意見を支持するものの比率は、「郡部」41.7%であるのに対し、「東京都23区・政令指定都市」では24.0%の比率にとどまり、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」は、同順で39.1%、51.0%であった。

図3-24 居住地別・老後における子や孫の付き合い方

